

習熟度別指導に役立つ複式授業の研究 (予報) A Preliminary Study of the Application of the Combined Class to the Teaching, According to the Learning Level

八田明夫

HATTA Akio

鹿児島大学教育学部

Faculty of Education, Kagoshima University

Abstract

This study focuses on the teaching method in a combined class and its application to the teaching in an ordinary class. One of the characteristics of a combined class is that students in different levels learn in the same classroom simultaneously under the direct or indirect guidance by the teacher. In the method a teaching technique bridging between two styles of guidance is called "Watari", and it can also be applied to the teaching method for students at different levels in the ordinary class to understand what they learn. Whatever the subjects are, the most important thing in using "Watari" technique is to give the students some constructive suggestions before teachers shift their attentions from one group to another.

Key words: combined class, direct or indirect guidance, "Watari" technique

要 約

本研究は複式学級の授業方法に関する予察的研究である。複式学級の指導形態は「直接指導」と「間接指導」の2つの指導形態がある。複式学級の授業方法の特徴の一つは、2つの指導形態の間の「渡り」という技法が含まれているということである。先生が学年の異なる児童・生徒を指導する複式学級の指導方法は、単式学級の到達度の違う児童・生徒の指導に役立つ。渡りの時、直接指導の最後に何を言って別の学年に渡っていくかが大切である。

1. 緒言

明治以来の日本の教育では「クラス全員に分かる様に教えたら全員が分かるはずだ」という教育観が一般的であった。その結果マスコミなどが「おちこぼれ」が出ていると指摘した現象（教師側からすると「おちこぼし」）が顕著になった。そうしたなかで、「個を生かした」教育や「個性を重視した」教育が叫ばれ、興味関心の程度や理解の早さの差を考慮した授業そして到達度を考慮した授業をする必要性が検討されて実践されてきた。単式学級内複式授業と言える授業の実践を通して「おちこぼし」をしてしまった児童・生徒、深くこだわりを持った児童・生徒に配慮した指導をすることが期待されるようになってきている。

しかし、おちこぼした児童・生徒、こだわりを持って観察を続けている児童・生徒を

そのままにして先に進んではいけないというメッセージは伝わってくるが、どうしたら良いかという情報は必ずしも十分とは言えない。コース別指導などの実践例が紹介されているが、もっと多様な指導法が議論されて良い。

昨年から長崎大学、琉球大学、鹿児島大学の教育学部が、離島僻地を多く抱える県として連携した研究を行っており、テーマの一つに「複式学級を中心とする教育実践研究及び指導法等の開発と応用」があり、複式学級の指導法を研究している。筆者は複式の学習指導から学級内複式授業に役立つ情報が得られるという期待を込めて、複式授業の研究を進めている。

本年度は研究の初年度であるが、研究の基本的方向や意義について述べ、若干の実践について紹介し、教員養成学部の学生が複式学級を担当する時に参考となる様な事柄、単式学級での複式的な授業に参考となる事柄について概略する。

2. 複式授業

全国の小学校に7143の複式学級（中学校234）があり、文科省は平成7年に小学校複式学級指導資料を発行し複式学級での指導の参考となる留意点や授業方法等を紹介している（文科省の統計情報より）。鹿児島県の様に離島や僻地を多く抱える県では、僻地教育の基本についてパンフレットを発行し、僻地・小規模校における教育の在り方や指導の在り方について解説し、初めて僻地・小規模校に赴任する教職員がその教育に理解を深め、授業を進める上で参考となるように配慮している（鹿児島県教育委員会,2005）。

(1) 複式学級の指導形態の類型

そのパンフレットの中で複式学級の授業形態や授業の仕方について解説している。複式学級に於ける教科指導は学年別の内容を指導する方法と、2学年を同じ内容で指導する方法がある。前者は1クラスの中に2つの学年の児童生徒が存在し、それぞれ自分の学年の内容を学習している学年別学習である。

後者は1クラスの中にある2つの学年の児童生徒を一つの学級と見なして指導する形態で、この方法は4つに細分される。(1)異内容または同内容・異程度を可能な限り共通の指導場面を設定して指導する「指導案が一本の案」、(2)両学年の内容をA年度B年度の2年間に配分し、両学年に同じ内容で指導する「二本案（A年度B年度案）」、(3)一本案と二本案の混合の指導案で重要な内容や理解が困難な内容は2年にわたり繰り返す、

表1 複式学級の授業の形式とその内容（鹿児島県教委のパンフレットより作表）

	指導案の種類	指導の形態	
	学年別の指導案	それぞれ自分の学年の学習をする	学年別学習
1つの学級とみなした指導	指導案が一本の案	共通の指導場面を設定して指導。学年差を認め、程度を変えて指導	2学年同一学習
	二本案（A年度B年度案）	両学年の内容を2年間に配分し、A年度、B年度で指導	2学年同一学習
	「折衷案」	一本案と二本案の混合。理解が困難な内容は2年にわたり繰り返す	2学年同一学習
	「完全一本案」	両学年の内容を1年間で学習できるように教材を精選。2年間繰り返す	2学年同一学習

容易な内容はA年度B年度に配分する「折衷案」(4)両学年の内容を1年間で学習できる様に教材を精選して単元を構成し、2年にわたって繰り返して指導する方法で「完全一本案」と呼んでいる方法に大別されている。

(2) 複式学級の授業

平成9年からフレンドシップ事業として毎年のように瀬戸内町の小規模学校で複式授業の参観を行ってきた。三大学連携事業でも名瀬市の学校や沖縄県渡嘉敷村の学校で授業参観を行なった。こうした経験と垂水市立松ヶ崎小学校の報告書を基に複式授業について述べる。

複式学級の指導方法として、学年別の指導案に基づく授業や、指導案を1本として学年の差を認め程度を変えて指導する場合は、教師が一方の学年を指導する「直接指導」と、もう一方の学年が自分達で学習を進める「間接指導」がある。間接指導の時は「ガイドさん」がいて先生の代わりに授業を進行する役目をおっている場合がある。ガイド役は間接指導の効率性を高める為の役割で国語や算数でよく取り入れられている。

「合同学習」や「無学年指導」のように学年の枠を外して3つ～6つの学年の子どもが一緒に学習を行なう形態もあり、体育祭や音楽祭、総合的な学習の時間などで取り入れられている。これらの指導形態は大規模学校でも実施されている指導形態である。

「集合学習」は複式学級を有する学校同士が子ども達を1校に集めて学習する形態で単式の学級を経験することで普段の少人数教育と違った環境で学習する経験をすることで、名瀬市の芦花部小学校において平成17年6月に行なわれた集合学習では、子ども達が多人数の中で意見を述べたり、自校ではできにくかったドッジボールなどのチームプレーを楽しんでいた。

集合学習と類似の「交流学习」は学校規模の大きい学校と交流し、それぞれの学校では経験できない学習を行なうものである。

(3) 複式授業の「ずらし」と「渡り」

複式の授業では「ずらし」という概念で指導案を作成する。「ずらし」を工夫する目的は、殆どの時間を直接指導にあてることができるようにするためである。

表2 複式学級指導の流れ（県教育委員会や松ヶ崎小学校の資料より作表）

A 学年	導入部の課題把握	課題追求	解決・定着	適応・発展
B 学年	適応・発展	導入部の課題把握	課題追求	解決・定着

（網掛けの部分が直接指導，教師は網掛けの部分の渡っていく）

A学年の直接指導からB学年の直接指導に移る時を「渡り」と呼んでいる。「渡り」の時に何を言い残していくかが大切である。A学年の直接指導の最後の部分でこれから間接指導に入る子ども達に先生が戻って来るまでの間、何を学習していれば良いかを解らせて離れるのである。間接指導中の子ども達が主体的に学習を進めることができるような手立てを講じておくことが大切である。間接指導の例として練習問題のプリントを用意したり、自主学習ができるワークシートを用意したり、視聴覚機器を使った学習や観察教材の準備をする必要がある。また、ある程度の人数の子どもがいる場合は話し合い活動を指示したりする。一人の学年と複数の児童のいる学年の複式学級の場合、一人になった時の「考察」は話し合いができないので、一人で何を考えたら良いかを十分に指示する必要がある。

(4) 複式授業の「直接指導」と「間接指導」の内容

直接指導の方が良いと思われる場面は、学習課題を立てる時、学習の方法を学ぶ時、主体的学習に必要な知識を伝えるべき時、学習のまとめを確認する時などが考えられる。

また、直接指導の最後の部分（間接指導に移る時）で指示すべき点として、学習活動に見通しを持てる指導内容であること、活動の内容を具体的に指示すること、自主的な学習で使用する資料を整理して提示すること、学習の流れを板書したりワークシートに示したりすること、再び直接指導に戻って来るまでに終われる活動内容であることが求められる。

間接指導では、子ども達が自主的に学習を進めていかなければいけないので、「学び方」を身に付ける必要がある。学び方の躰は学年の早い段階から身に付くようにおりにふれて指導を繰り返していくべきものである。学び方の躰は単式の学級でも必要なことであるが複式学級では特に重要な課題である。音読の練習、自学自習の練習、話し合いの練習、黒板や小黒板の使い方やルールの学習、観察の仕方、ビデオやパソコンの操作の仕方、こうした主体的学習の仕方の修得の中からガイド役の育成を行なう必要がある。

間接指導に入る直前にもガイド役と打ち合わせをすることも必要である。間接指導後には学習でつまづいた点はないか、理解はどの程度深まったかを直接指導で確認する必要もある。

3. 単式授業の中の課題

次に単式のクラスにおいて、複式の授業方法が活用できることを述べたい。単式のクラスの授業で必ずしも全員が同じように理解できるわけではないという現実がある。また、一人ひとりの良さを生かした指導の工夫の中から「一斉授業において、同じ課題で同一の実験を行なう場合でも生徒一人ひとりの発想を生かし、生徒自らの考えで学習を進められるようにしたい」と考えて実践している例もある（服部, 1995）。授業について行けない子どもや別の発想でこだわりを持って長く観察したり深く考えたりする児童・生徒に対し、教師の都合だけで授業を進めて行くことで、人為的な「おちこぼし」を作り出すことがないようにしなければならない。そのためにも教師は指導案を作成する時、子ども達の個性や理解の差を配慮した計画をたてる必要がある。その際に参考となるのが複式学級の指導法とその留意点である。

4. 単式学級内の指導に生かせる複式授業

垂水市立松崎小学校は小規模複式学級の研究成果報告書の中で、複式学級の授業は「学び方を学ぶ」授業の基盤となる、という考えを述べ、「単式学級の習熟度別指導、個別指導・問題解決学習を行なう時に複式授業の『子どもの主体的な学習活動の展開』の考え方が生かされる」と結論付けている。単式学級の指導経験のある教員達が複式学級の指導方法を研究した結果、そのプラス面とマイナス面を明らかにする中で得られた結論である。複式学級の指導は「教師にとって単式学級時の習熟度別学習実践のてがかりとなる」という結論を得ていることも、本論で主張していることを裏付けている。

5. 教員養成学部の課題

三大学連携事業に取り組んでいる長崎・琉球・鹿児島大学の教員学部などは複式授業に理論を持って取り組める教員の養成を行なうために、「複式学級の指導法」について

授業科目を設定する必要がある。鹿児島県下の複式学級を参観する中で、産休補助教員として九月に赴任して直ぐに複式学級を担当している教員と出会った。若さと熱意で充分乗り切っておられたが、多くの労力・努力を必要としていた。

本年度は、筆者が複式授業の研究をテーマとしていることから、試行的に複式授業の「渡り」について講義の一部で紹介・解説した。学生が授業後の感想を記述した中に「今日、複式授業について初めて教えていただいて興味を持ちました」と述べたものが有った。来期から自戒の念を込めて本研究の成果を講義の中に取り入れて行きたい。出来れば、教科教育を専門とする複数の教員で担当する新しい科目「複式学級の指導法」を教育学部の中に開設する事を臨みたい。

引用文献

- 服部公彦(1995)：生徒一人ひとりの個性を生かす探究活動の評価－化学変化と原子・分子－中学校理科教育実践講座 SCIRE スキーレ第15巻， p.147－153.
- 鹿児島県教育委員会(2005)：南北600キロの教育　－へき地・複式教育の手引き－ 8pp.
- 鹿児島県松ヶ崎小学校(2005)：複式小規模校における教育課程編成 12pp.